

狂言の歴史

日本には、いろいろな種類の演劇や芸能があり、その中で、狂言は、能とともに室町時代に完成し、650年という長い歴史をもつ演劇です。

能と狂言をあわせて、現在では能楽と呼びます。

能楽は、奈良時代に中国から伝わった散楽という

芸能がもとになっています。軽わざや歌やおどりなど、さまざまな芸を見せる散楽は、平安時代から鎌倉時代に、猿楽とよばれるようになりました。そして猿楽のなかの、歌や舞いを中心とする悲劇的で幻想的な劇が能となり、パントマイム的な演技やおもしろおかしいセリフを中心とする劇が、狂言になっていきました。

能と狂言は、同じ能舞台で、いっしょに演じられて、兄弟のような関係にあります。能楽は、足利幕府や徳川幕府などの武家に大人気でした。明治の中ごろからは、多くの人々から親しまれるようになり、今では世界中から注目されています。



狂言の特徴

①たいへん短い劇です。劇の始まりから、おわりまで、30分前後という狂言が大部分です。特別なめずらしい狂言でも1時間ぐらい、逆に、一番短い狂言は、10分足らずのものもあります。

②登場人物が少ない、というのが第2の特徴です。主人と召使い、夫と妻とか、2人の人物がいれば、狂言は成り立ちます。大勢物といって8人も10人も出る狂言もありますが、たいていは、2、3人の登場で1つの狂言ができあがっています。

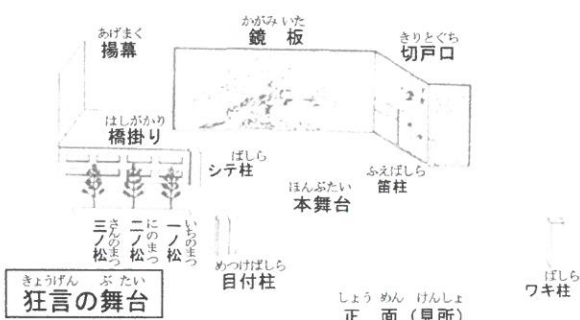
③狂言は、とても簡単な形式でできた劇です。劇といっても、舞台装置や背景の絵や照明などのような大じかけな道具は使いません。囃子といって能とおなじように笛や鼓が入る演目もありますが、伴奏音楽や擬音などは入りません。人物は、だれもみな、お化粧をしていません。

④セリフとシグサ、いいかえればコトバと身ぶりで演じます。私達が、人に自分の気持ちや考えを伝えたいと思うときは、コトバを使います。コトバだけで足りないときは身ぶり、手ぶりを使います。私たちににとっていちばん大事な表現の方法なのです。場面がどこなのか、どこへ出かけて行くのか、どこについたのかを、全部、セリフで言い表します。擬音や動物の鳴き声などもセリフで言ってしまうのです。

⑤狂言は、笑いを中心とした劇です。喜劇、といってもよいでしょう。私たちはだれでも、清く正しく美しく生きたいと願っていますが、実際には、人間ならだれでも弱みをもってしますし、いろいろな失敗をすることがあります。狂言は、そういう人間のありのままの姿をおもしろおかしく、描き出しています。

しかし、狂言は、ただ思いつきのチャレや冗談でゲラゲラ笑わせるのではなく、きちんとした台本にもとづいた、落ちついたおかしみ、明るく力強い笑いになっています。

(羽田 昶)



狂言を演じてみよう

プログラム

1・狂言のお話

狂言の歴史や大きな特徴など

2・袴 狂 言

「盆山」

盆山（盆のなかに木や石で自然の風景をかたどった、箱庭のようなもの）をたくさん持っている人がいました。ある男が、それをほしいと思い、「ひとつください」とたのみましたが、どうしてもくれません。そこで男は、こっそり盗みに入りました。主人は、盗人が顔見知りだと気づき、からかってやろうと思い、「あれは犬だ」「いや、猿だ。」といい、盗人はそのたびに鳴きまねをしますが、つぎに魚の「タイ」だといわれ、困ってしまいます。…

3・全員でおけいこ

擬音・発声・謡い・シグサなど

「兎（うさぎ）」
あんのやまから
こんのやまへ
とんできたるは
なにじゃるろ
かしらにふたつ
ふ ぷ と
ほそうてなごうて
ぴんと はねたを
ちゃつとすいた
うーさーぎーじゃ

狂言ワークシヨップ
みんなで「謡（うたい）」を
語ってみよう！

休 憩

4・狂 言

「茸」

ある家の庭に大きなキノコが生え、取っても取っても、いくらでも生えてくるので、気持ちがわるくなりません。知り合いの山伏に頼んで祈って退治してもらおうとします。山伏が、呪文をとねえ、様々に祈りますが、祈れば祈るほど、キノコは増えてきます。…

○山伏はなんと祈ってお祈りしていましたか。

○どんなキノコが出てきましたか。

きのこの役は生徒や先生。自作のお面や笠も注目です。

スタッフ&キャスト

■狂言師 高澤祐介 前田晃一 金田弘明 / 三宅 右矩 三宅 近成
■監 修 三宅 右近
■企画・制作 中坪 眞